

第 8 章「わんぱく相撲」競技事項

1. 競技心得

(1) 運営者側

競技を開始する前に、次の諸事項に留意すること。

ア) 選手点検

- ① 風邪その他の症状がないかどうかの確認
- ② 既往症の有無及び競技に支障がないかの確認
- ③ 注意事項を守っているか(爪切り、用便その他の確認)

イ) 準備運動

怪我防止の為、参加選手全員に対し行う。

ウ) 競技上の注意

選手全員を集合させ競技についての注意事項を中心に、禁じ手をふくめ注意事項の徹底をする。

(2) 競技者側

ア) 競技は必ず主審の^{さしず}指図に従うこと。

イ) 呼び出しに応じて二字口で立礼をして(俵を踏まないように土俵に入ること)競技を行う。

ウ) 勝負が終わったならば両方とも二字口で礼をし、勝ったものだけが^{そんきよ}蹲踞して主審より勝ち名のりを受けること(俵を踏まないようにして土俵の外に出る)。

エ) 勝ち名のりは^{そんきよ}蹲踞のまま目礼し受けること。

オ) 土俵だまりで足を投げ出したり、土俵で足をこすらないこと。

カ) 競技に審判員より物言がついたときは、土俵の下におり、主審の指示により行動すること。

2. 競技規定

(わんぱく相撲のために特に定めており、大相撲とは異なります。)

(1) 勝ち負けのルール

つぎの場合は負けとする。

- ① 相手より先に土俵を出たとき。
- ② 相手より先に、足のうら以外のからだの一部が砂についたとき。
- ③ 禁じ手を使ったとき。(3)を参照(「禁じ手・禁じ技」ページへP. 69も参照)
- ④ 主審の指示に従わなかったとき。

(2) 立 合 い

立合いは主審の指示に従い、両手をついて「はっけよい」で立つこと。「待った」はない。

注) 2度づきは負けとなるので、特に気をつけること。

(3) 禁じ手・禁じ技

これを使うと反則(直ちに中止して審判競技の上、負けとなる場合と取直しの場合がある)になる。危険を防ぐためのルールであるから、決して使わないように注意すること。

禁じ手 ① ^{にぎ}握り^{こぶし}拳^つで突^{なぐ}き、殴ること

② ^は張^てり手

③ ^{とうはつ}頭髪^{つか}を掴むこと

④ ^め目、または^{みぞおち}水月などの^{きゅうしよ}急所^つを突くこと

⑤ ^{まえたてみつ}前立禪^{つか}を掴むこと

⑥ ^{のど}喉^{つか}を掴むこと

⑦ ^{むね}胸、^{はら}腹^けを蹴ること

⑧ ^{いっし}一指・^に二指^しを持って^も折^おり返^{かえ}すこと

⑨ ^か噛むこと

禁じ技 ① ^そ反^{わざ}り技

② ^{かわず}河津^が掛け

③ ^{さば}鯖^お折り

④ ^き極^だめ出し

⑤ ^{がっしょう}合掌

⑥ ^{かも}鴨^いの^{くび}入れ首

⑦ ^{こうとうぶ}後頭部^{あいて}を^{ふくぶ}相手の腹部^{につける}につける

3. 審判規定

(1)この大会には審判長1名、副審判長若干名、審判員若干名をおいて大会の審判を行う。

(2)審判員は勝負の判定、その他審判に関することに当る。

(3)主審の判定に対して副審の間に疑義を生じた場合は、審判長を中心として、主審及び副審との合議の上決定する。

(4)主審の判定に対して異議の申立ては、担当している審判長並びに副審に限る。

(5)禁じ手を用いた場合は、競技を中止させ、審判協議のうえ勝負及び取直しを決める。

(6)競技中、負傷によって競技の進行不能と審判が認めたときは、審判合議のうえ負けとすることがある。

(7)競技中前袋の落ちた時は、負けとする。

(8)約3分間の試合で勝負のつかないときは水入りとし2番後に取り直しとする。引き続き水入りとなった場合も同様に2番後の取り直しとし、以降これを繰り返す。これは子供の体力面を考慮したものである、必ず間を空けての取り直しとすること。

(9)他の事項については日本相撲連盟大会競技規定に定められた「審判規定」に従うものとし、その運用は大会当日の審判団に委任する。

4. その他

ここに定めのない事項については実行委員会の決定による。

審判規定(日本相撲連盟審判規程: 抜粋)

(1) 審判員及び任務

- ① 審判員の構成は、審判長、主審及び副審4名(計6名)とする。(第2条)
- ② 競技の勝負判定は、当該審判員に限る。(第3条)
- ③ 審判長又は副審が主審の勝負判定に対して異議又は疑義がある場合においては、協議を行うものとする。(第6条)

(2) 勝ち負けのルール

ア) 次の場合は勝とする。(第7条)

- ① 相手選手を先に勝負俵の外に出した場合
- ② 相手選手の足の裏以外の一部を先に土俵につけた場合

イ) 次の場合は、審判員の協議により当該選手を負けとする。(第9条)

- ① 負傷等により、競技続行が不可能と判定された場合
- ② 禁手を用いた場合又は用いたと判定された場合
- ③ 選手が勝手に競技を中止した場合
- ④ 審判員が故意に立たない選手と認めた場合
- ⑤ 審判員の指示に従わない場合

ウ) 競技中まわしの『前ぶくろ』が解けてはずれた場合は、負けとする。(第13条)

(3) 禁手とは、次の各号のことをいう。(第10条)

(禁手が用いられたときは、主審は直ちに競技を中止させる)

- ① 拳で殴ること。
- ② 胸部、腹部等を蹴ること。
- ③ 目、水月等の急所を、拳又は指で突くこと。
- ④ 頭髮をつかむこと。
- ⑤ 咽喉をつかむこと。
- ⑥ 前ぶくろ(前立禅)をつかむこと、又は横から指を入れて引くこと。
- ⑦ 一指又は二指を折り返すこと。
- ⑧ 噛むこと

(4) 『張り手』が用いられた場合は、直ちに競技を中止し審判員の協議により処置する。(第11条)

- ① 全審判員が故意に用いたと判定した場合は、負けとする。
- ② 審判員のうち故意によるものでないと判定した者がいる場合は、取り直しとする。

③ 取り直しとなった勝負において、同一選手が再度用いた場合は、故意、過失にかかわらず負けとする。

④ 『張り手』とは、選手本人の肩幅の外側から相手の顔面を張ることをいう。

(5) 禁じ技(日本相撲連盟審判規程補則: 抜粋)

ア) 危険を防止するため、次の技を『禁じ技』とする。(第1条)

- ① 反り技(居反り・櫓反り・撞木反り・掛反り・外櫓反り)
- ② 河津掛け
- ③ さば折り
- ④ 極め出し・極め倒し(かんぬき)

イ) 『禁じ技』が用いられた場合は、直ちに競技を中止し、取り直しとする。(第2条)

ウ) 『禁じ技』で勝負が決まった場合は、審判員の協議により取り直しとする。(第3条)

エ) 同一選手が『禁じ技』を二度用いた場合は、審判員の協議により負けとする。(第4条)

(6) 危険な組み手(日本相撲連盟審判規程補則: 抜粋)

ア) 危険を防止するため、次の状態を、『危険な組み手』とする。(第5条)

- ① 脇に入った相手の首を極めること。(抱え込む)
- ② 後頭部を相手の腹部につけること。(突っ込む)
- ③ 鴨の入り首

イ) 『危険な組み手』となった場合は、直ちに競技を中止し、取り直しとする。(第6条)

ウ) 同一選手が『危険な組み手』(鴨の入首を除く)を二度用いた場合は、審判員の協議により負けとする。(第7条)

(7) 立ち会い

立ち会いは、主審のかけ声によって立ち合わせるものとする。(第14条)

① 立会いは、両手をついて主審のかけ声によって立つものとする。「待った」は原則として認めない。(本大会の特別規程)

(8) 競技開始後3分を経過しても勝負が決しない場合は、競技を中止し、直ちに『取り直し』とする。

(第17条)

- ① 2番後取り直しとする。(本大会の特別規程)